医療ガイド

くも膜下出血

“ある日突然…”を防ぐために

脳の健康管理は検査がカギ

気温の差が激しいと、気になるのが脳の病気。ここでは「くも膜下出血」の予防や治療などについて、大西脳神経外科病院の大西宏之先生に詳しく教えてもらいました。

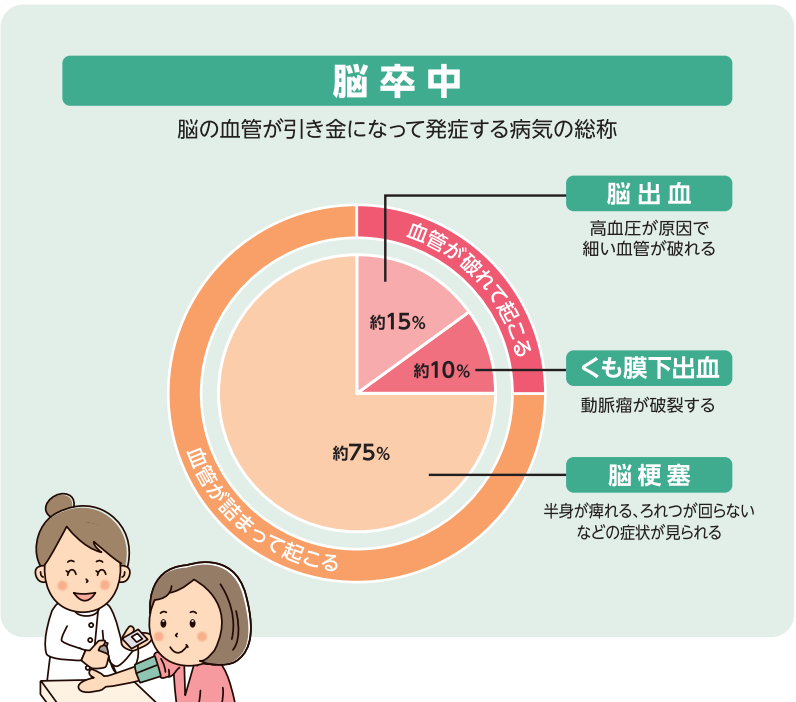
大西脳神経外科病院
副理事長 副院長
脳神経外科部長
脳血管内治療科部長
大西宏之先生

「くも膜下出血」とは？

「脳卒中」とは、脳の血管が引き金になって発症する病気の総称です。卒中とは、"卒然として邪風に中(あたる)"。つまり、突然、悪い風にあたって倒れてしまうという意味があります。

脳卒中の中で最も多いのが、血管が詰まって起こる「脳梗塞」。血管が破れて起こる出血性は全体の約4分の1で、このうち約15％が「脳出血」、約10％が、血管のこぶ(動脈瘤)の破裂によって起きる「くも膜下出血」です(左記表)。代表的な症状は、突然の頭痛。頭を金属バットで殴られたような激しい痛みを起こします。また出血すると脳内の圧が上がるので、嘔吐や血圧が上昇。ひどい場合は昏睡状態に陥り、死に至ることも。うまく治療ができても、重い後遺症を抱えてしまう人もいます。

このような点から、くも膜下出血は発症の割合は少ないものの、予後が悪く、生命の危険におよぶ重い病気と言えます。その上、"前兆がない"こともやっかいです。だからこそ、「疑う」ことは重要。軽い頭痛だからと放置しない。ちょっとでも突然の激しい痛みがあった場合は、脳卒中を疑って、すぐに病院に行くことです。

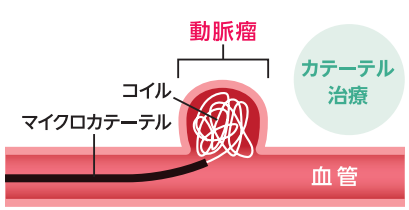


治療

傷口が目立ちにくく負担の少ない治療が主流に

発症したら、破れた動脈瘤が再破裂しないよう外科的な治療を施します。一般的な治療は2通り。一つは、「開頭手術」。動脈瘤のところに洗濯ばさみのようなクリップをかけてつぶし、再破裂を防ぎます。もう一つは「カテーテル治療」。破れたこぶの中にマイクロカテーテルという、髪の毛ほどの細くてやわらかい管を入れ、詰めものをするようにして血液の流れを止めるものです。

以前は開頭手術が主流でしたが、近年は医療技術の進歩により、カテーテル治療が飛躍的に増えています。太ももの付け根から管を入れるので、傷口が目立ちにくい。入院も1週間ほど、退院して2、3日もすれば職場復帰できるので、患者さんの負担も軽くなりました。



予防

健康を過信しない 予防には「検査」が大切

「くも膜下出血」は、比較的働き盛りの人に多く発症しています。にもかかわらず、検査を敬遠しがち。どんな病気でもそうですが、まさか自分がなるとは思わないものです。

しかし、くも膜下出血は、今や検査をすることで予防できる病気です。脳ドック(MRI検査)で動脈瘤が見つかれば、破れないよう処置し、発症を防ぐことができます。75歳以上は年1回、50代は2～3年に1回、30～40代は5年に1回、脳ドックを受診するのが目安。また動脈瘤をもっている人は、血圧にも気をつけてください。上は130、下は85を目安に血圧をケア。検査で脳の状態をきちんと調べて、自分の健康をしっかり管理しましょう。

検査・血圧の目安

脳ドック	
75歳以上	年1回
50歳代	2～3年に1回
30～40歳代	5年に1回
血　圧	
130／85㎜Hg	